

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
山田孝雄
津田左右吉
和田哲郎

狂言集
中

古川久校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「狂言集」中 古川久校註

昭和二十九年十一月十五月初版發行
昭和三十一年四月三十日第二版發行
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田
區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二八〇圓

目次

凡本

例文

繩 綱 五

千 鳥 三

木 六 駄 三

武 惡 四

伊 文 字 四

八 幡 前 五

引 敷 簪 五

二 人 袴 五

庖 丁 髻 五

法師が母 五

川上座頭 六

金 岡 四

座 禪 八

鈍 太 郎 九

塗 師 八

岡 太 夫 三

髭 櫓 四〇

伊 呂 波 五

鱸庖丁	一四	犬山伏	三六
伯母が酒	一五	膏藥煉	三五
水汲新發意	一六	鍋八撥	三九
腹立ず	一七	煎物	四〇
花折新發意	一四	昆布賣	三五
布施無經	一八	合柿	六一
泣尼	一九	伯養	六七
名取川	二〇	井礪	三五
宗論	二五	茶麴座頭	六二
蟹山伏	二七	月見座頭	六五
市日	三一		

狂言集(中)

古川久

凡 例

一、本書は上卷に續き、三十九番を收めた。

一、右の中「鈍太郎」「宗論」「月見座頭」の三番は、鷺畔翁及び矢田蕙齋自筆本から本文を援用し、他はすべて鷺賢通本に據つた。

一、内容は上卷に引き續き、左の通りに分類した。

第六の家來をシテとするものの残り、「繩綱」から「武惡」までの四番。

第七は、嫁取りをテーマとするもの、すなはち「伊文字」の一番。

第八は、掣取りをテーマとするもの、すなはち「八幡前」の一番。

第九は、掣入りをテーマとするもの、すなはち「引敷掣」から「庖丁掣」までの三番。

第十は、夫婦をテーマとするもの、すなはち「法師が母」から「髭櫓」までの八番。

第十一は、親子・兄弟・伯父甥・伯母甥などの關係をテーマとするもの、すなはち「伊呂波」から「伯母が酒」までの三番。

第十二は、僧をシテとするもの、すなはち「水汲新發意」から「宗論」までの七番。

第十三は、山伏をシテとするもの、すなはち「蟹山伏」から「犬山伏」までの三番。

第十四は、物賣や職人をシテとするもの、すなはち「膏藥煉」から「合柿」までの五番。

第十五は、盲人をシテとするもの、すなはち「伯養」から「月見座頭」までの四番。

一、校訂や頭註の方針などは、すべて上巻に準ずる事とした。

狂言集

人物

シテ（太郎冠者）
アド（何某）
主。

縄 なは

絢 なひ

- (一) 段髪斗目、長袴、小刀、扇。
- (二) 相談。
- (三) 縞髪斗目、狂言袴、腰帶、扇。
- (四) 演者の實名を言ふ。
- (五) 「行つて」の約。

- (六) と言ひ、文をシテに渡す。シテ受取る。
- (七) 承知。
- (八) と主は座につく。シテは少し脇へのいて。
- (九) 以下舞臺を廻り、道中の心。

主^一 これはこの邊りの者でござる。召使ふ者を呼び出だいて、談合致^三す事がござる。太郎冠者居るかやい。シテ^三はあ。主あるか。シテお前に。主汝^三を呼び出だすは、別の事でも無い。何の誰方^四へ使^五にいて來い。シテ畏^五まつてござる。主いて言はうには、お約束の通り太郎冠者を遣はします、委細はこの文の中にあると言うて、持つて行け。シテさやうに申せば御合點^七でござるか。主かね^六のお約束ぢやによつて合點ぢや。定めて待ちかねて居られう程に、早う行け。シテ畏^八まつてござる。これは合點の行かぬ事を仰せつけられた。さりながらお使ぢや程に、急いで參らう。お約束^九の通り太郎冠者を遣はします、委細はこの文の中にありますと仰せられたが、何とも不思議な事でござる。參つたならば様子が知

(一〇)と廻り止め。

(一一)この場處。ここ。

(一二)物申す、案内申すの略で、訪問の際の挨拶語。

(一三)装束附は主に同じい。

(一四)誰れぞ。

(一五)驚いた時に發する聲。

(一六)御苦勞。

(一七)「頼んだ人」の音便。主人。

(一八)目下の者に使ふ對稱の代名詞。なんぢ。

(一九)よこす。

(二〇)と言ひ、文を渡す。アド受取り開いて見る。

(二一)「よこす」の轉。

(二二)呼びかけの「やい」の疊語。

(二三)以後。

(二四)疑問の感動詞。

(二五)言ひぐさ。辭柄。

(二六)對稱の代名詞。あなた。

(二七)と歸らうとする。

(二八)呼びかけの語。

(二九)盡。名詞に接し、その限りを盡す意。又それ次第、その結果などを現す。

るでござらう。^{一〇}いや參る程にすなはちこれぢや。物まう案内まう。お宿にござりまするか。^{一二}アド表に聞き馴れた聲で、物まうとある。案内とは誰そ、^{一四}物まうとは。^{一五}シテ私でござりまする。アドえい太郎冠者、よう來た。大儀ぢやよ。^{一六}シテ頼うだ人のお使に參つてござる。^{一八}アドそちをこさるる筈ぢや。何と言うてこされたぞ。^{二〇}シテ頼うだ人申されます。お約束の通り太郎冠者を遣はします、委細はこの文の中にあると申されます。^{二二}アドどれ／＼これへおこせ。かう言うてこさるる筈ぢや。^{二四}やい／＼太郎冠者。向後は某の家來ぢや程に、さう心得。^{二六}シテや。アドそちは向後某の家來ぢやとの言ひ事ぢや。^{二八}シテそれは又何と致いて、こなたの御家來にはなりましてござるぞ。^{三〇}アド様子は後後知る事ぢや。某を頼うだ者ぢやと思つて、奉公を勤めてくれい。^{三二}シテそれは合點の參らぬ事でござる。それならば立ち歸つて、様子を承つて參りませう。^{三四}アドこれ／＼まづ待て。^{三六}シテ何事でござる。アドそれ程に思ふならば、話いて聞かさう。これへ來い。^{三八}シテ畏まつてござる。アド別の事でも無い。何を隠さうぞ。そちの頼うだ者と勝負つくをして、汝を取らうのやらうのと言つて、某の勝ちになつて汝を取つた。向後某の方で勤めてくれい。^{四〇}シテ様子を承りますれば、御尤もでござ

(三〇) 念を押す意の感動詞。のう。
なあ。

(三一) 「おつしやる」の約。「言ふ」
の敬語。

(三二) 愛顧する。最眞する。

(三三) 間投助詞。「よ」の轉か。

(三四) 何はさて置き。もとより。

(三五) やる。

(三六) いかにも。勿論。

(三七) 神經痛などの爲、何となく手
の痛む事。好色一代女「この二三
日は空手が發りましたと見ぬ顔を
する」

(三八) 得。よう。

りまする。さりながら、いかに勝負づくをなさるとござつても、私を取らう
のやらうのと仰せられて、こなたにはようもく取らせられましたの。^{三〇} アド某
は嫌ぢやと言つたれど、是非ともにとおしやるによつて取つた。いづ方で勤む
るも同じ事ぢや程に、某の方で勤めてくれい。シテ仰せらるる通り、いづ方で
御奉公致しまするも、皆お主へのお爲でござれば、こなたへ御奉公仕りませう。
又お馴染の事でござる程に、お目をかけさせられて下されませい。^{三三} アド何がさ
て久々の馴染の事ぢや程に、随分目をかけて使うて取らせう。^{三五} シテそれは忝け
なう存じまする。アドさて汝が来るを待つてゐた。遠路へ使にいてくれい。シテ
遠路へお使に。アド^{三六} なかく。シテお安い事ではござれども、私はこの間脚氣が
おこりまして、唯今これへ參るにも膝を揉み臍^{すね}をさすり、やうくこれまで參
つてござる程に、遠路へのお使ならば、御許されて下されませい。アド何と言
ふぞ。脚氣がおこつたによつて遠路へは行かれぬ。シテなかく。アドそれなら
ば何ぞ下にある役を言ひつけう。近日普請^{ふしん}をする程に、繩をなうてくれい。
シテ繩でござるか。アド^{三八} なかく。シテこれもお安い事ではござれども、私は空手^{そくで}
がおこつて、繩もえなう事はなりませぬ。アド何と言ふぞ。空手がおこつて繩

（三九）さてく。

（四〇）他の者。

（四一）いかやうとも。室町時代小歌集「濡れて後には兎も角も」

（四二）以下舞臺を廻り、道中の心。

（四三）無理である。分らぬ。

（四四）志無い事。丈夫。

（四五）兩人歩みとまる。

（四六）と橋掛りへ行き、待つてゐる。

（四七）言ひかける時の感動詞。

（四八）演者の實名を呼ぶ。

（四九）得意とする事。

もえなふ事はならぬ。シテなかく。アドはてさてそちは達者な者かと思ふたれば、思ひの外病身な者ぢや。そのやうな者は使はれぬ。連れていて餘の者と代へて貰はう。シテそれは兎も角もでござる。アドさあく来い。シテ畏まつてござる。アドそちが頼うだ者は聞えぬ。随分無事な者ぢやとおしやるによつて取つたが、思ひの外病身な者ぢや。シテ私の病身な事は、頼うだ者には隠いて居りまするによつて、さやうに申されたものでござりませう。アドいや何かと言ふ中にこれぢや。汝はそれに待つてゐよ。シテ畏まつてござる。

アド物まう。御亭主でござるか。主物まうとはどなたでござるぞ。アド某でござる。主いや誰殿。ようこそ出させられてござる。さて唯今太郎冠者を遣はしましたが、何と別條も無う勤めまするか。アドその儀について參つてござる。あれは常常達者な者かと存じてござれば、殊の外病身な者でござる。遠路へ使に行けと申したれば、脚氣がおこつたと申して參りませず、それならば繩をなうてくれいと申してござれば、空手がおこつたと申してえなひませぬ。あのやうな病身な者は、使はれませぬ。餘の者と代へて下されい。主はてさてそれは合點の行かぬ事でござる。殊に繩をなふは得物でござるが。これはさやうの事も

(五) 他稱の罵語。あいつ。

(五二) 奉公に誠意を示さない事。童子草「左様の者は、主君にも不奉公をし、人の心をまどはし」

(五三) 疎略。怠慢。世間胸算用「我人も今日と明日との日なれば、何がさて如在は御座らぬ」

(五四) 程。くらゐ。體。

(五四) 一際。一層。

(五五) と言つて、囃子座の前にある。

(五六) と主は少し正面を向き、柱ごしに呼ぶ。シテは舞臺に入る。

(五七) と少しかがむ。

ござらう。最前こなたへ遣はします時、様子を申さずに遣はいてござるによつて、きやつが腹を立て、それ故不奉公^{ぶほうこう}を致いたものでござらう。私の如在無^{じようさい}い通りを使うて見せませう程に、こなたには裏道より戻らせられた分^{ぶん}で、物蔭^{ぶかげ}からのぞいて見させられい。アドこれは一段とようござらう。使うて見せさせられい。主まづこれへ寄つてござれ。アド心得^{こころえ}でござる。主やい／＼太郎冠者^{じやうこうしや}へ。シテ誰殿は歸られましてござるか。主なか／＼。そちは使はれぬによつて、餘の者と代へてくれいと言うて、裏道から戻られた。シテさやうならば申し上げませう。いや申し／＼。こなたにはいかに勝負づくをなさるとござつても、私を取らうのやらうのと仰せられて、ようも／＼誰殿の方へは遣はされました。主汝が恨むるは尤もぢや。某が悪い程に、堪忍をしてくれい。シテその上かやう／＼の事で遣はすとなりと仰せられますれば、お恨みとも存じませぬに、肝腎の時は一命をもさし上げませうと存ずる程の心底でござるものを、様子を仰せられいで遣はせらるゝとあるは、お情無い事でござりまする。主汝が言ふところは一道理ぢや。何事も某が誤まつた。この上は手を下ぐる程に^{しやうじ}堪忍をしてくれい。シテああ勿體無い。こなたのさやうに仰せらるるものを、

(五)特別に。ことに。

(五)諺。深く交渉しなければ、人の批判はむづかしいの意。

(六)どうして。何の。決して。

(六)「置かんやは」の略。「なひませう」の意味を強めて言ふ。
(六)と後見座へ行き、繩を取り持ち出し。

何とお恨みと存じませうぞ。唯今までの通り、お目をかけさせられて下されませい。主何がさて今までの通り、目をかけて使はうぞ。シテそれは別して忝けなう存じます。主さて汝は先程の心底で、何とて誰方では不奉公をしたぞ。シテさればそのお事でござる。そうじて人には添つて見よ、馬には乗つて見よと申しますが、誰殿は人使ひの悪い人でござる。まづあれへ參つて下にも置かれませいで、汝が来るを待つてゐた、遠路へ使に行けと申されます。畏まつたと申したならば、晝夜に限らず申しつけられうと存じて、脚氣がおつてござるによつて、遠路へのお使ならば御許されいと申して參りませなんだ。主これは出かいた。シテそれならば何ぞ下にある役を言ひつけうとあつて、繩をなへと申されます。御存じの通り、繩は私の得物ではござれども、いかなくなひませうぞ。空手がおこつてなはれぬと申して、これもなひませなんだ。まいやそれについて思ひ出いた。いづぞやの繩は何としたぞ。シテまだなひさして置きました。主急に要る事がある程に、なうてくれまいか。シテ何がさてなひませいで。主繩を取つて參りませう。主早う取つて來い。シテ畏まつてござる。さてこなたへ申し上げたい事がござります。まづこの繩の先を

(六三)と安座する。

(六四)と繩の先を持ち、シテの後少し右の方へよつて控へる。

(六五)右の手を口でしめし、繩をなひ初める。

(六六)諺。似た者夫婦。

(六七)本當。

(六八)敬愛か複數を示す接尾語で、ここは前者の場合である。

(六九)みだりがはしい。輕輕しい。

類聚名義抄「輕ワワシ。カロシイルガセ」

(七〇)兩手を二度上げる。

(七一)「何がさて」の約。何はさて置き。もとより。

(七二)一氣に。次に。

(七三)なだめる。慰める。宇治拾遺物語「物取らせなどして、すかし問ひければ」

控へさせられて下されませい。^{六三}主心得た。^{六四}

シテ^{六五}

私の繩をなふ間に、誰殿の方の様子を話してお聞かせ申しませう。いや

申し、誰殿は男の事でござるによつて、さやうにも存じませぬが、鬼の女房に

は鬼神がなるとやら申ししますが、定でござる。^{六六}あの女房衆はわわしい人でこ

ざります。まづあれへ參つて見まするに、髪と申せばいつ結つたままぢやや

ら、薄の穂を亂いたやうに、はつくと致されまして、わめかれまする顔は、

二目と見られたものではござりませぬ。^{七〇}(笑)。その上朝寢を致されます。晝

寢を致されます。そこへ眼が覺めると、茶くれいぐでござる。ちと返事

が遅ければ、なぜに返事をせぬぞと申して、わめかれます。ああ怖ろしい事

でござる。(笑)。さて畏まつたと申して、茶を持つて參れば、今度は酒を飲ま

うでござる。何が^{七二}大茶碗で突つかけぐ飲まれまして、眼に角を立ててわめか

れまする顔は、今も見るやうにござる。(笑)。その上子供衆は大勢ござり、一

人の子が乳吸はうと申せば、又一つ方よりは湯を飲まうの茶を飲まうのと、あ

あ、かしましい事でござる。(笑)。女房衆もうるさう思はれまするやら、やい太

郎冠者、ちと連れていてすかせぐと申されまするによつて、畏まつたと申し

(四)と左の手を出す。

(五)と右へさし。

(六)ちくり。

(七)男女・主従・朋友などの間柄の吉凶。合性とも記す。

(七)二度つめる體をして。

(七)呼びかけの言葉。

(八)そこなる。そのの。

(八)讒言。讒訴。源平盛衰記「西光法師が無實の讒奏に依つて」

(八)愛撫。

(八)どちら。いづれ。

て一人の子を抱かうと致せば、おれも抱かれう我も負はれうと申して、裳裾に取りつき袂にすがり、ああるさい事でござりまする。(笑)。私も腹の立つま、物蔭に連れて参つて、しつくりとつめつてござれば、わあ〜と言うて泣かれまする。(笑)。それを女房衆の聞きつけられまして、はて合點の行かぬ事ぢや。機嫌のよい子も太郎冠者がすかせば泣くが、相性でも悪いかなどと申されまする。(笑)。相性の悪いこそ道理なれ、しつくり〜。アドやい、そこな奴。シテこなたには歸らせられませぬか。アドまだ歸らぬかと。よう某の讒奏をしたな。シテいや讒奏は致しませぬ。賞めましてござる。アドその上某の子供を打擲したな。シテいや打擲は致しませぬ。愛を致いてござる。アドやい、あの横着者。ただ置く事では無いぞ。シテ眞平許いて下されい〜。アドどちへ逃くるぞ。人は無いか。捕へてくれい。やるまいぞ〜。